週刊新潮 2015 年 10 月 29 日号掲載の記事が学内外で衝撃をもって受け止められてから早いものでまもなく一年という月日が経過しようとしています。もっとも、大変憂慮すべきことに、件の人物は今もなおその地位にしがみついて教壇に立ち続け、性懲りもなく新規ゼミ生を募り、公での説明作業を怠るばかりか、（真相がどうであれ）被害を訴えている元女子学生との間で生じた本件事案への拙速な対応が大学に本来備わっているはずの静謐な教育・研究環境を実質的に乱す状況を助長していること、そしてその最大の要因が自らに求められることについてとても反省の色を示しているようには思えません。大学教員の教育倫理について極めて大きな課題を提示した本件事案に対する取り組み次第では、事案の舞台となった大学、そして件の人物が現段階で構成員をなしていると思しき学界の良識も問われかねない事態に陥っていると言っても過言ではありますまい。以下は、本件事案の風化・無関心を阻止する目的から学内外で一定期間にわたり有志による独自の聞き取り調査を行って得られた意見の一部です。件の人物が知らないはずはない「思想・言論の自由市場」という考え方の先駆者であるジョン・ミルトンの有名な言葉、「真理と虚偽とを組み打ちさせよ、自由で開かれた対戦の中で真理が負かされたためしを誰が知るか」の意味を噛みしめつつ、この自由市場に皆さんも参入されて「真理」の発見に是非とも挑戦してみて下さい。

・「隠しておけないことだから言うけど、僕には妻と子どもがいるんだよ。」→　この言い方自体に自意識過剰と秘密主義的、ツンデレ的な性格が垣間見える。

・「だから今すぐは難しいけど、でも必ずいつかは結婚しよう！」→　一貫して「教員と学生」の関係でしかこの人を見ることはできません。結婚なんてもってのほか。同じ屋根の下で暮らすだなんて考えたくもない。自慢話や意味不明のカタカナ言葉ばかりで疲労困憊にさせられるだろうし。それに憲法 24 条の趣旨を無視するかのような関係が強いられるのではないかという気もします。それよりも何よりも結婚を自分から言い出していること自体が教員として問題なのでは？

・「今度一緒のときはそんなシシィの恥ずかしい姿を、カメラとビデオで記録してあげるね。」→　「そんな恥ずかしい姿」って具体的にはどんな姿なのだろう？まさか全裸姿？まさかもう記録済み？でもたとえそうであっても騒動発覚後は速やかにその手元にある記録は完全消去しているんだろうけど。

・「とてもきれいだよ。おちんちんがおっきくなってきたよ。」→　理性崩壊の極致。セルフコントロール不能状態。あの目の表情と口の動きでこれを口走ったかと思うと、虫唾が走る…。

・「シシィ、もっともっと、すべてを魅せて！シシィの滴がほしい！飲みはしたい！」→　「魅せる」って言い方がキザったらしいし、世代間格差を感じさせるよね。要するに「滴」というのは「愛液」と「尿」のことでしょ。ちょっと「変態」以外に形容する言葉が見つからないのですが。

・「シシィの滴（しずく）」って、通信販売限定の女性化粧品の名称とかでありそう。「ドモホルンリンクル」のライバル商品みたいな感じで。

・「授業終ったあと、少しでいいから挿れさせてほしいんだ…」→　この「…」が、いい年こいて物欲しそうな感じで本当に気持ちが悪い…。何でこんなことを言う人の講義を義務的に受けさせられないといけないのかがどうしても納得できない。はっきり言って４月に入学して以来この人の講義を聞くという作業に集中できなくて毎時間困っている。

・「シシィの脚、実は大好きなんだ！あの足、歩いているだけで性的に興奮するって、知ってた？」→「実は」って言うけど、じゃあ普段は「君は脚が太いから大嫌い」とか言ってんのかよ。それに「脚」なのか「足」なのかどっちなの？「知ってた？」って、知るわけないだろ、そんなもん。アホか。いったい誰に聞いてるんだよ。

・「シシィの温かい壁に包まれたい！僕の顔をシシィの両足ではさんで、僕の顔をびしょびしょにして。」→　自らの変態的性癖についての告白に呆れて物が言えない…。要するに「挿れたい」「人間便器になりたい」ってこと？こんな文章書いて、この人はポルノ作家にでもなりたいの？

・「立っているシシィの脚の間に、顔をおしつけるよ。そしたら、腰をくねらせて、締め付けて！」→変態の極致ですね。自分で窒息死するのは勝手だけどさ。ネットでハードコアポルノの free tube とかを見過ぎなんじゃないの？

・この人のナニが自分の大事なところに挿ってくると想像しただけでゾッとしませんか…。私には耐えられません。拷問に等しいです。ある意味、死んだ方がマシかも。

・彼女はアナタのことを一人の「男性」としては別に何とも思っていなかったのでは？自分が熱を上げて一方的に燃え上っていたという事実をきっと意地でも認めたくないんでしょうね。「彼女は私の要求に同意の上で応えていた」って言うかもしれないけど、それはそうでもしないとアナタから何されるかわからない恐怖心に基づいてのことだったんじゃないでしょうか。

・「学生である彼女が教員である自分に対して心理的には抵抗しづらい立場に本来的にある」という、いわば当然ともいえる動かしがたい絶対的な上下関係の前提を悪用し、自らの欲望の赴くがままに性欲の充足を無反省に試みようとして、それが叶えられないとわかるや自己保身と彼女への批判に転じたとしか思えない。果たしてこれがいい年した大人の人間である大学教員が親子ほど年齢の開いた人間である学生に対してすることなのか。これを「パワハラ」と言わずして何と言う。

・「おちんちん」とストレートに言ったかと思えば、「滴」とか「温かい壁」とかオブラートに包んで表現しているのがこの人の面白いところ。もちろん「変」「センスがない」という意味においてですが。

・自分が「裸の王様」だからといって教え子の女子学生を研究室内で全裸にするなんてことが許されていいわけがない。

・こういった人物を教育の現場にいさせないためにこそ第三者的な立場でしっかりと調査し、真相を究明することが「早稲田大学ハラスメント防止委員会」に課せられた任務ではないのか。

・自分に酔っている自己愛的性向者。講義内容も普段の会話内容もペダンチック（衒学的）気味。話を聞いているうちに段々と胸糞が悪くなってくることが多い。

・弱い者を狙うアナタは卑怯者。名前も顔も見たくない。不愉快です。反省するどころか未だに相手女性の尊厳を踏みにじりかねない形で事実の否定に奔走しているだなんて最低最悪。

・恋は盲目。いや、正確には「独りよがりな性的欲求解消ありきの恋愛ごっこは盲目」。特定の学生に対するプレゼント攻勢もその流れで考えれば納得が行くというもの。

・単なる「変態」だと思う。いや、別に「変態」であること自体は結構なんだが、このような自分の「変態ぶり」を外部にうかがわせるものをなぜ電子記録媒体に残してしまっているのか。脇が甘すぎる。

・「老いらくの恋」がダメだとは一概に言えないけれど、それに破れたからといって相手女性への憎しみを一方的に募らせ、その人格を貶めるかのような事実無根のことを周囲に触れて回るだなんてまともな人間のすることではない。こんな人間をあろうことかいまだに教壇に立たせているなんて信じられないし、大学側の対応も理解に苦しむ。しかもその「相手女性」というのが自分のゼミに所属する女子学生であったというところに言いようのない悪質性を感じる。

・「キミの売春容疑について警察から事情を聞かれた」ということだけど、なんて答えたの？まさか「そうらしいですね」「そのように聞いてますよ」とか警察に答えたんじゃないよね？で、その警察ってどこの警察？明治通り沿いにある戸塚警察署？というか、実はそもそもその話自体が口から不意に出てしまった出まかせ話なのでは？だとしたら指導教員ともあろう者が教え子の「売春容疑」話を自分の理不尽な要求を拒まれた腹いせにデッチ上げたということになる。言語道断ではないか！人を人として見ていないような思い上がった態度に強い怒りを覚えざるをえない。

・普段から私的な言論空間に対する公権力の介入には人一倍神経を尖らせているに違いないアナタのことだから、自分が窮地に追い込まれても公権力の助けを安易に請うわけにはいかない以上、基本的には自力救済を図る以外にないだろうけど、公の場においてではなく、ごくごく一部の限られた人たち（同業者や親族や大学の同僚や事務所の人間）のみを対象に密室的に自己の正当性を主張してそれで自己を救済できたとでも思っているの？身の潔白を証明できたとでも思っているの？それが憲法学者が言論空間からの公

権力排除を声高に主張することで得られる副次的結果なのだとしたらこれ以上の皮肉はない。また、そのような人間を周囲の者が無根拠にかばい立てするのであれば「同罪・同類の人間たちの集まりに等しい」との誹りを免れないのではないか。その腐蝕の構造にメスを入れるべき。そのような人たちが「護憲」なんて言っても心に響いてこない。

・この人が講義を通じて言っていることと実際にやっていることに整合性なんてあるのだろうか。結局は「言うだけ番長」だよね。そもそも「公の場での対抗言論を駆使した自己救済」を本気で実践する気なんてさらさらないとしか思えない。「なんでオレがそんな面倒なことしなきゃなんないの？オレをアリカワとかアオヤギと一緒にするなよな」。これが本音なのではないかと疑ってしまう。痴漢とか試験問題漏えいに比べると全然大した問題ではないと考えているのかも。ひたすら世間の無関心と騒動の風化を待ち続けてガス抜きを静観しているのだろう。ということは沈黙を決め込むことも「対抗言論」に数えられるのか？不作為の対抗言論？

・「認めたら終わり・認めたら負け」って意地になっているんでしょうね。幼稚というか何というか…。

・一度こういう噂が立って、しかもそれを自ら積極的にパブリックな場で否定しようとしないような「いわく付きの人間」の講義を選択の余地なく抽選で受講せざるをえない自分の不運が恨めしい。これこそまさに「囚われの聴衆」。大学はこのような点を不快に思っている受講生もいるということについてきちんと認識してくれているのだろうか。しかも「わいせつ行為概念」について研究している憲法の先生だなんて…。

・自分も人の子の親なら彼女の御両親の心労のほどが少しはわかるはずだと思うんだけどなぁ。彼女だけでなくその御家族全員も苦しめているということになんで気持ちが行き届かないんだろうね。自分の名誉を死守することにしか関心がなく、自分のエゴの犠牲になった人たちのことなどまるでゴミくず同然と考えているのかもしれない。

・警察沙汰になっていないことと彼女が精神的に参っている状態にあることが結果的に変な安心感と余裕をこの人に与えてしまっているのは間違いないと思う。「学内の人間さえ丸め込めば何とかなる」と。

・あそこまで頑なに元号制に反対する理由がまったくわからない。それに五輪を見ないとか周囲に言っているスタンスも大人気ない。でも本当は見てるんじゃないの？過去に元号制によって何か個人的に不利益でも被った経験があるのだろうか。自分だけで意固地になるのは別にいいけれど、その価値観を学生にも無意識に押し付けているかもしれないということぐらいは自覚してもらいたい。

・研究書としては異例ともいえる売れ行きを見せた日本評論社発行の『立憲主義と民主主義』(2001 年)について「なんであれが高評価を得ているのか全然わからない。大したことないのに。」とかつて言って

いたという話だけど、「当時単著どころか編著すらもなかったような人間がよくそんな偉そうな口を利けるもんだ。多分単なる嫉妬心からだろうな。」と同業者たちはほとほとあきれ返っていたらしい。

・一般的に憲法の教員って（確かに本当にそのような人がいることは確かなんだろうけど）そんなに偉くて尊敬に値するような人たちなのだろうか。少なくともこの人やその取り巻きの人たちがそうだとは思えないし、思いたくもない今日このごろ…。

・「中央学院」って何すか。どこかの予備校の名称ですか。中央大学からクレームはないのですか。

・悪く言われたくなければ悪く言われないように普段から自分の行いに気を付けていればいいだけのこと。それに、教員と学生の関係において何が悪くて何が悪くないかぐらい教員としての立場上基本的にわかっているはずでは？報道が事実なら（およそ事実なんだろうが）その行為が文脈的に教員として「許される行為」とはとても思えない。教育的指導の域をはるかに超えてしまっているのは明らか。

・報道された所業のうち、送信したとされるメールの受信記録と週刊誌掲載の自筆とされるメモ書きが大きな物的証拠となるだろうね。事実の有無をはっきりさせるには記録開示と筆跡鑑定もやむをえないと思う。

・週刊誌発売直前の 2015 年 10 月 20 日に報道内容が事実かどうかを確かめるための調査委員会が学内に立ち上げられたはずだけど、1 年近くも立っていまだに調査結果が出ていない・公表されていないってどういうこと？まさか大学ぐるみで騒動の風化を狙っているとか証拠隠滅に躍起になっているなんてことはないと思いたいのだが…。

・言論空間を萎縮させてまで自己防衛をはかろうとしているのではないかという疑惑がいまだ拭えないでいる。それがもし本当ならば憲法学者がそんなことをして許されるのだろうか。支持者たちを使った工作活動に余念がないのかもね。報道内容に文句があるとか事実無根であるのなら可及的速やかに公の場に出てきて正々堂々と自分の言葉で申し開きするべき。それが一番の王道であるはずなのに、本気で真正面から事態を打開しようという気概が感じられない。どうしても正面突破できない理由があるからでは。

・政府の集団的自衛権行使には強硬に反対するクセして自分は集団的自衛権をいとも簡単に行使するんですね、お仲間や信奉者の力を借りて。情けないと思いませんか？またそのお仲間の方々も情けなくないですか？もちろん、揃いも揃って冷笑・嘲笑されてますよ。

・北朝鮮じゃあるまいし、「王様は裸だ」と自由に言うことがはばかられるような息苦しい雰囲気をこの日本国内で生み出す原因を作っている張本人がまさか「自称・護憲派の憲法学者」だなんて悪い冗談であってほしいんだけど。

・この人物を支援する人たちは、(まさかとは思うが)「推定無罪なんだから最終判断が出されるまで周りがごちゃごちゃ言う資格なんてものはない」とかさすがに言わないよね？

・週刊新潮 2015 年 10 月 29 日号が発売されたのが 2015 年 10 月 22 日。そして 2 か月後の 2015 年 12 月 23 日に大須賀明先生が逝去。本当にお気の毒としか言いようがない…。こんなことがあっていいのか。「恩を仇で返す」とはまさにこのこと。絶対に許せない…。

・この人自身がこれまで行った公での唯一といっていい「対抗言論」らしきもの。「事実の根拠を欠く記事を掲載することがないよう強く警告します」(週刊新潮 2015 年 10 月 29 日号掲載)。は？たったこれだけ？？人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！

・週刊新潮 2015 年 10 月 29 日号に掲載された記事の最後の部分「過去の言動について“唇寒し”と悔やんだところで、法学者としての権威は地に堕ちたも同然である」。「法学者として」はもちろんだが、「大学教員として」もだろう。

・「都の性欲・早稲田の森」の懲りない彼とその仲間たちにジョン・ミルトンの次の言葉を送ります。

「善良な人間以外に自由を心から愛せる者はいない。それ以外の人間は自由ではなく放縦を愛しているのだ。」

「自らを律し、激情と欲望と恐怖を抑制できる人物は一国の王よりも偉大である。」

「いかなる自由にもまして良心の命じるままに知り、語り、そして論じることのできる自由を我に与えたまえ。」

「言論の自由を殺すことは真理を殺すことである。」